

## 加藤二郎先生のご逝去を悼んで

宇都宮大学国際学部教授 加藤二郎先生は2002年（平成14年）8月17日に急逝されました。

国際学部教職員・学生一同なすすべもなく茫然とした夏の日、折りにふれて心によみがえります。先生は1950年（昭和25年）9月生まれ、享年51歳でした。

加藤二郎先生は山形県のご出身で、1973年3月東北大学文学部国文学科を卒業され、直ちに同大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程に進学、1978年3月同博士課程を単位取得退学されました。1979年4月、宇都宮大学に教養部講師として赴任され、以後23年余の長きにわたり本学において教育と研究に尽くされました。この間、1994年（平成6年）10月には新たに設置された国際学部に移られ、助教授・教授として国際学部及び大学院国際学研究科の発展に多大の貢献をされました。

奥さまの景慧先生のお話では、加藤先生の生家は農家で、高校までは毎日帰宅すると農作業に励まれたそうです。貧乏だったので、本はほとんど買えず、借りた本で勉強されたというお話でした。お別れ会で高校時代の同級生が、自宅にあった漱石全集を1冊、また1冊と借り出しては読み耽った若き日の加藤先生を語ってくださいました。2000年12月、加藤先生は『漱石と禅』により母校東北大学から博士（文学）の学位を授与されますが、夏目漱石の人と文学に惹かれる原点は故郷の村にあったといえるでしょう。

加藤先生は時に破れかぶれの、一筋にひたむきな研究者でした。業績目録からは、夏目漱石の全体像解明をめざす烈しい気魄が伝わってきます。先生が倒れられたのも、絶筆となった原稿を正座して書き上げ、手書きで清書し、紐綴じにして岩波書店へ送られた直後でした。「俺にしかできないことがある」と本人も何か感じているようだったと奥さまは話しておられます。

2001年春、国際学研究科第1期生の修了にあたり、加藤先生が国際文化研究専攻の有志にあてた言葉をここに引用します。

『薤上の露何ぞ晞き易き、露晞けば明朝更に復た落つ、人死して一たび去れば何れの時か帰らん。』  
薤はカイ、おおにらのこと。晞はかわく。薤露歌という漢代のものです。どなた様も御健勝の日々をお過ごし下さいます様・・・・・・・・。

人の命のはかなさを薤上の露にたとえる漢代の葬歌を引いて、院生の門出に贈った加藤先生ならではの「はなむけ」です。漱石に「薤露行」と題する短編があり、漱石がこの小品のなかで、古代中国の王公貴人への挽歌を表題に中世英国アーサー王伝説を重ね合わせようと試みたことを想起すれば、これを漱石研究者である先生の国際学部・国際学研究科生へのメッセージと見ることもできましょう。加藤先生が、国際学部と国際学研究科に課せられた「日本からのグローバルな発信」に寄与してくださることを私どもは期待しておりましたが、かなわぬ夢となってしまいました。亡くなられる直前の2001年度、学部の入試委員長と人事調整委員長の重責を二つながら担われ、多忙化を呪いつつ、しっかりと学務をこなされた姿が思いおこされます。

加藤二郎先生

国立大学の法人化が迫った今、先生を失ったことは惜しんでも惜しみきれませんが、故郷の地で安らかに眠りください。

2003年1月17日

国際学部長 藤 田 和 子